

千葉も、椿森の辺りが攻撃されましたが、私の母親の実家が、JR稲毛駅の小仲台にありまして。近くに軍需工場があったんですよ。小仲台の山人中、今でいうと、熊野神社の辺りは崖でして。赤土だったから、掘りやすいし、崩れる心配はないからって、防空壕、横穴掘って、嫁入り道具の桐ダンスやなんかを、リヤカーで、持って行ったんです。でも、アメリカ軍は頭いいから、軍需工場を、狙うんですね。小仲台一带は、焼夷弾が直撃ですよ。

昭和二十年、戦争が激しくなってきた。東京も空襲になるって時でも、うちは、疎開はしませんでした。先祖代々続いている家だったからね。戦時中は、父方、母方の、兄弟達が頼って来て、五家族、六家族で、住んでいました。東京が空襲で焼けちゃって、いつときはは、三十人、四十人が疎開しに来ていましたよ。東京から歩いて来て、まず、津田沼辺りで一回休んで、それでもつて来たんです。

一応、土地が三百坪くらいあったから、いち早く、木造のバラック建てて、二階を各部屋ごとに区切ってね。長期間ではなかったけど、親戚の人達が、たくさん住んでいました。だから、お風呂なんか一回入ると、もう、最後に入る人の時には、アカが浮いちちゃって。今じゃあ、考えられないですよ。お湯が無くなっちゃったりしたもんですよ。お湯を沸かすにしても、燃料が、無かったからねえ…。少年時代ってのは、かなり戦争の影響を受けましたよ。父が戦争で満州に行つて、その後、ソ連軍に拉致されて捕虜になって、シベ

リアに行つて。帰つて来たのが、一番遅かったからね。昭和二十二年かな？帰つて来たんですけども、父親の顔が、わかんなかったですよ。だって、戦争が始まるとすぐに行つちやつて、父と全然会つてない、成長期の時に見ていないからね。

父親がいない分、母親の力つてのは、すごかったですよ。子ども四人抱えて。それに、うちの場合は、まだ祖父母が頑張っていたのを覚えています。おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に住んでいましたから。当時だと、お米も統制でしたけど、やみ米買って、お煎餅に加工して売つたり、夏場は、アイスクリームを作つて、潮干狩りのお客さんに、売つたりしていましたよ。

戦争が終わつたつていう、天皇陛下の玉音放送は、うちのラジオで聞きました。正直、怖い思いはしましたけどもね。というのは、B二十九の爆撃機なんか、東京湾に落ちると、乗務員の死体が、浮きあがつたんです。それでもつて、稲毛海岸に、南風が吹くと、この辺に流れ着いて。アメリカ兵は、少なかったらしい、みんなオーストラリアとか、そういう人達が、前線に立たされて、特攻隊のような飛行機で、日本に爆撃して来てね。まあ、半分は届かなかつたんですけれども、その死体が流れ着いて来たもんだから。

戦争が終わつたのに、米軍が上陸して来て、仕返しにくるぞーって。負けたんだけど、向う、何しに来るんだかわんないし。だから、ジープでもつて、国道十四号線を、東京方面から走つて来た時には、もう、家の中に入って、ふすまの隙間から、こう覗いて見ていたもんですね。いやあ、そういう怖い思いもしましたよ。